Color Science Association of Japan

日本色彩学会誌　VOLUME 28 NUMBER 4 2004

研究会活動報告

シンポジウム　J.-P. ランクロさんを囲んで 色を教えること、色を学ぶこと

環境色彩研究会

報告 シンポジウムの概要

小西　裕美

元国立パリ高等装飾美術学校教授のJ.－P.ランクロ氏の来日にあわせ、シンポジウム「色を教えること・色を学ぶこと」が関東支部後援、財団法人日本塗料協会協賛のもと、東京塗料会館で2004年10月19日(火)、午後2時から5時までの時間帯で開催されました。

パネリストには市原恭代氏、吉田愼悟氏、北畠耀氏を迎えました。参加者は平日の午後、雨にも拘わらず講師も含め定員ぎりぎりの64名と盛会でした。

長谷川関東支部長の挨拶、永田主査の講師紹介につづき、第一部のランクロ氏の「色彩の課題－学習と実践」と題した講演はスライドで学生の課題作品等の紹介をしながら、環境・社会性・国際性等、専門家の育成とその交流の必要性まで広範な内容で語られました。フランスにおけるレベルの高い実践的な色彩教育の状況をビジュアルに垣間見ることが出来たのは得難い収穫でした。

第二部はランクロ氏も交えたパネルディスカッションで、永田主査が司会を担当し、三氏の15分ずつの発表では、市原氏はパワーポイントを使って、日本人の色彩感覚を歴史の観点と脳のV4領野研究を通して色覚について話され、吉田氏はカラースライドを使って、大学での実践的な色彩教育とキャンパスや野外での色彩実験が環境デザインを総合的にとらえる理解につながると話されました。北畠氏は説明パネルを使って、色彩学の発展史をニュートンから入って教え、芸術と科学の融合を理解させる教育法について語られました。三者三様のプレゼンテーションで色彩教育の多彩な方法が示されたいいシンポジウムになりました。その後、パネリストの意見開陳と質疑応答が行われて終了しました。今後も多くのテーマでこのような会合が必要ではないでしょうか。

講演要旨 色彩の課題　学習と実践

Jean Philippe Lenclos

今や色彩は建築や各種デザインなどのすべての分野では避けて通れない領域である。しかしこれらの業種は国際化にさらされている。つまり、国際的規模のコンペや競合である。ヨーロッパでは、ドイツ、フランス、イギリス、ポルトガルなどの間で競合が激しい。

日本と韓国、さらには中国との間にもこのような競合は存在すると言える。10年位前までは、色彩は心を満たすもの、商品や建築に付加価値を与えるものという程度に考えられていたが、今日ではマーケットを意識する産業の開発部門や建築では、独立した分野としてとらえられるようになった。

このような状況の中で、色彩を教えるとすれば、単に美しい調和をもたらすための色彩の基本を教えるだけではすまない。

視覚、触感、外観、サイン、シンボルなどの総てをつなぐ感覚的世界の構成要素として色彩を捉えるべきであろう。

新商品はもはや単に視線をとらえるだけでは通用しない。商品は手にとった時の質感の違いで評価される。さまざまな素材が、知のテクノロジーと創造的感性の絶妙な錬金術により生まれている。

今日、色彩は我々の日常にあふれている。誰もが色彩を楽しみ、衣服やアクセサリーなどの実生活に役立てる。人々は、メディアが色彩を用いて流すメッセージに囲まれている。消費者は流行に後押しされ、それぞれのライフスタイルや好みに応じて、意識するとしないに拘わらず自らの求める商品を様々な色彩の中から選択することを望み、それは可能になった。消費財の場合、色彩はブランド識別およびデザインの主要構成要素であり、多様化する市場を征服するグローバルな工業システムの中に組み込まれている。

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

都市では誰でも、時として気づかないまま、色彩の中で生活している。都市景観は、住宅街や工業地域も含めて入念な計画の対象となっている。記念建造物や歴史的地域は保護され、再評価されている。大規模集合住宅は改修され、長い間放置されたままであった都市周辺は集中的な改造の対象となっている。

色彩はこのように貴重な遺産の復興に大きく拘わる要素なのである。

このような社会の中で、未来の色彩デザイナー、造形美術家、グラフィックデザイナー、装飾家の育成が必要とされる。

色彩を教えるとは、生徒の創造性を刺激し育てていくこと、カラリストとしての色彩における才能を引き出していくということである。自由に創造するための知識、道具、方法を与えることであり、いずれ各分野でリーダーとしての立場を確立できるように導くことである。

教育の目的は、可能な限り正確な情報や法則を基にして、色彩を活用できるよう指導することである。

生徒達の大半は入学時にすでに色彩に対する才能を持っているであろうが、無意識であって、その応用に関しては知識はない。

色彩を教えるためには連続的な演習が必要である。最初に、二次元のプロジェクトでの色調の推移や色彩調和の構成を教え、次いで、三次元のプロジェクトでの同様な内容を指導する。

実際の現場での仕様書に応えるために、ますます複雑化するシステムを確立することが必要とされている。そのために、どのような職種にも言えることであるが、まず方法、分析さらに複雑なものへという順序で学んで行くべきである。単なる理論の繰り返しではなく、実践的な現場を優先することで色彩の才能は見いだされ、当初の障害は徐々になくなっていく。

日々変化し多様化していく色彩のクリエイティブなマーケットが求めるものを正確に把握することが現場では重要である。現場では、生徒と教師の間にダイナミックで活発な関係が生まれる。

コンピュータは数百万の色彩を提供してくれるが、クリエーターたちは、建築、スペクタクル、メディア、工業製品の色彩設計で生じる問題に素早く答えを出さなければならない。

結論として、色彩教育は色彩の法則とメカニズムを解読することを目的とするとともに、個々の才能を引き出し、デザイン表現の分野で遭遇する困難に対処する原則と方法を与えることである。視覚的創造の分野では、色彩は流行と創造的流れを予見し発明する素晴らしい切り札のひとつである。一言で言うなら、創造とはその時代の文化と芸術の歴史をしるしづけるものである。

（宮崎敬子訳）

J.-P. ランクロ氏

シンポジウムの風景

NII-Electronic Library Service